

ふじのくに地球環境史ミュージアム 10周年を迎えて思うこと

天岸 祥光

1) ミュージアムの滑り出しは順調でした

私は静岡県自然史博物館ネットワークの池谷初代理事長の跡を継いで、もともとこのような博物館には縁遠いのに（プラズマ物理学専攻）、二代目の理事長を引き受けてしまったのが運の付きでそれ以来 15年の月日が経ってしまいました。

NPOは県職員ではありませんが、ミュージアムの主にバックヤードを全面的に委任されているので、全員ミュージアム内に部屋を持ち、事務室もあります。

従ってNPOも私もこの間ミュージアムの設立に関してほとんどのことに関係してきましたので今度10周年記念を迎えるに当たり、私自身はやや複雑な思いを抱きながら思うところを書くことにしました。

NPOの皆さんの「静岡県に自然史博物館を」の運動の熱気を感じ（なにしる全国的に県立博物館の無い数少ない県ということもあり）、またわれわれNPOの意気込みをじっくり聞いてくれた県の池谷廣理事（政策企画担当）が博物館の「基本構想」を検討する委員会の設置に動いてくれたことも、私にとってはおおきな励みになりました（この間の事は、自然史しずおか2024第86号「ミュージアム発足から携わってきて今思うこと（前半）」に詳しく書きました）。

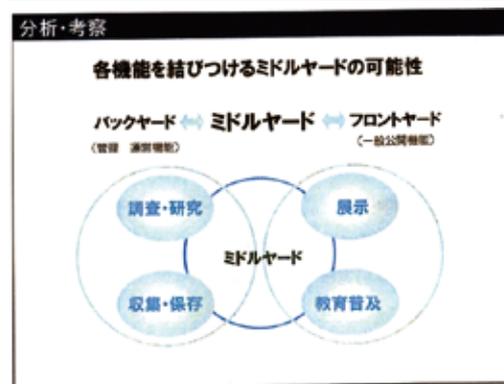
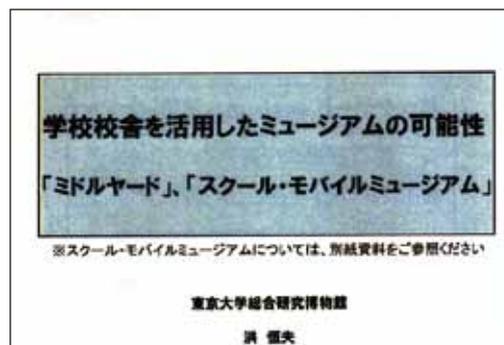
まず基本構想検討委員会ですが、私のような素人はわずかで、構成メンバーに博物館関係の日本のトップクラスを何人も池谷氏は選んでくれましたので、一年間熱のこもった有意義な議論を行うことができました（NPOからは東海大学の博物館に深く関係してきた柴さんが選ばれています）。中でも東大の総合博物館の洪先生の主張が光っていました。洪先生はこれからの博物館はただ並べているだけではだめだと、自ら実証済のアイデアであるミドルヤード展示、モバイルミュージアムなどの構想を打ちだしてきました。

これらの斬新なアイデアを全面的に基本構想として取り入れ、またバックヤード、ミ



基本構想検討委員会名簿

安田喜憲 (委員長)	静岡県補佐官（学際担当） 東北大学大学院環境科学研究科教授 国際日本文化研究センター名誉教授
天岸祥光 (副委員長)	静岡大学名誉教授（元静岡大学学長） NPO法人静岡県自然史博物館ネットワーク理事長
遠藤秀紀	東京大学総合研究博物館教授
小川義和	国立科学博物館事業推進部学習企画・調整課長 筑波大学客員教授
熊野善介	静岡大学教育学部教授 静岡大学創造科学技術大学院・大学院教育学研究科教授 静岡県総合計画審議会委員
洪 恒夫	東京大学総合研究博物館特任教授
柴 正博	東海大学社会教育センター・博物館学実務課課長補佐 NPO法人静岡県自然史博物館ネットワーク理事
下田路子	東海大学社会環境学部教授 静岡県森林審議会委員
高桑正敏	神奈川県立生命の星・自然史博物館名誉館員 シルク博物館館長
中山定雄	静岡文化芸術大学デザイン学部空間造形学科准教授



ドルヤードを中心としたNPOの役割も重視する内容の基本構想案が出来上がりました（2014年3月）。とにかくバックヤードを中心とする仕事人としてNPOを大々的に採用した博物館は全国的にも初めてでしたから、私も気分的にこれでNPOの皆さんに顔向けができると思っていました。

2) ところがすぐに大きな挫折が待っていました

こうしてミュージアムの前身の資料センターが2015年(平成27年)に開館し、ミュージアムの開館は翌年の3月でした。初代館長は基本構想検討委員会の委員長安田喜憲氏です。ミュージアム開館を祝して静岡新聞2面にわたって川勝知事と新館長の対談が大々的に載りました。ところがこれを読んで私はめまいを覚えたのを今でも記憶しています。

2面にわたる対談で、新館長の言葉にはNPOのNの字も出てこなかったのです。あんなに構想委員会でNPOの存在の重要性とこのミュージアムの最大の特徴を論じてきたのに、NPOには全く言及していなかったのです。

これは一体どういうことなのだろうか。私はNPOの皆さんに合わせる顔を失いました。私は基本構想検討委員会で全くの無力だったのだろうか。

とにかく明らかになったことは、安田新館長の頭の中には、NPOは希薄な存在だったのです。そのことを基本構想検討委員会で見抜けなかったのは私の最大の失点でした。

ですからスタート直後からの安田館長の行動・発言は、我々NPOにとっては奇異なもので、とても信じられないことばかりでした。

まずミュージアムの長い名称「ふじのくに地球環境史ミュージアム」ですが、これはこのミュージアム設立に意欲を示してくれた川勝知事の強い意向だったようで、それでは致し方ないとしても、「地球環境史」というこれまでの全国の自然史系博物館とは異なる方向性が打ち出されたわけですから、6名の研究員(学芸員)採用人事では安田採択委員長は地球環境史に重点を置いた採用人事を行うべきところ、他の自然史博物館と変わらない分野の採用と大学と変わらない論文主義で選んでいました(そのことについては前述の86号に詳述)。つまり川勝知事の意向を全く無視した人事を行っていたのです。言い換えればこのミュージアムの向かうべき方向性などは全く考えない人事だったのです。

こんな調子でしたから、我々NPOの主力メンバーと研究員との話し合いの場であるべき委員会などの検討はおざなりで、ミュージアムの運営のための組織は無いに等しく、ただ館長の独断と偏見で動いていて、これではいけないと思い、安田館長に直に会って、運営

協議会のような外部有識者からなる委員会の設置を強く要求しました。これは博物館法の第20条に公立博物館に、博物館の運営に関し館長の諮問に応じ、館長に対して意見を言える最高機関の協議会を置くことができるようになっているからです。しかしこれもなかなか立ち上がらなくて、やっと第一回運営協議会が開催されたのが、2017年(平成29年)3月21日でした。ミュージアム始まって1年後だったのです。

しかし一難去ってまた一難で、次に示すような運営協議会の構成メンバーで、多くは博物館とは縁遠い方々ばかりでした。協議会の初めの挨拶では「素人ですので、しっかり勉強させていただきます」という自己紹介が続き、しかも開催は年に一回とのことで、これではとても館長の諮問機関にはなりえないと、まともここで絶望してしまった次第です。

ことほど左様で、私もさすがに力尽きた感がありましたが、開館してから6年後に現在の佐藤洋一郎館長がお見えになってやっとミュージアムらしくなってきたので、私は開館10周年記念ではなく4周年記念だと思っています(なおこの後半の部分については、自然史しずおか第87号(2024年)「ミュージアム発足から携わってきて思うこと(後半)」に詳しく書きましたのでそちらをご覧ください)。... (づづく)

ふじのくに地球環境史ミュージアム運営協議会委員名簿

氏名	役職等
天岸 祥光	特定非営利法人静岡県自然史博物館ネットワーク
今井 利昭	(公社)静岡県観光協会しずおかツーリズムコーディネーターチーフ (一社)静岡県経営者協会会長
岩崎 清悟	(一社)静岡県経営者協会会長 静岡ガス(株)代表取締役会長
岸本 吉生	中小企業庁長官官房 中小企業政策統括調整官
北村 敏廣	(株)静岡新聞社代表取締役専務
木苗 直秀	静岡県教育長
後藤 康雄	(一社)静岡県商工会議所連合会前会長 はごろもフーズ(株)代表取締役会長
桜井 茂樹	NHK 静岡放送局長
中井 徳太郎	環境省大臣官房廃棄物・リサイクル対策部長
長澤 友香	静岡科学館・く・る館長
細田 満和子	星槎大学副学長
町田 宗鳳	広島大学名誉教授
真砂 靖	弁護士
森 勇一	昆虫考古学者
吉澤 保幸	(一社)場所ブнкаフォーラム名管理理事